

二〇二六年三月二四日(参加者16名)

模糊として巨船の影や沖霞	わかば
初蝶や吾子の歩みのまえうしろ	澄子
開運宮詣でのわれに初蝶来	なつき
初蝶の紬の裾にとまりけり	あきこ
春霞沖の巨船の航遅々と	えいじ
病み抜けて久の吟行初蝶来	康子
初蝶を供に散歩す川堤	康子
海の道延びるたる先に島霞む	むべ
捨てられし花大根に初蝶来	むべ
海峡の沖より汽笛春霞	わかば
おぼつかぬ羽根の動きや初蝶来	こすもす
上へ下へ音符のごとく初蝶来	あきこ
霞む沖へと出港す漁船かな	よし女
初蝶の日の庭石にとどまりぬ	博充
初てふの舞へば手の止む庭仕事	松原白土

若鮎句会秀句・みのもる選・二〇二六年三月二三日